

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 5 月 31 日現在

機関番号：14501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K16760

研究課題名(和文)室町時代以降における日本漢字音の再形成過程の研究

研究課題名(英文)Study on process of Sino-Japanese reformation after the Muromachi period

研究代表者

石山 裕慈 (ISHIYAMA, Yuji)

神戸大学・人文学研究科・准教授

研究者番号：70552884

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円

研究成果の概要(和文)：日本漢字音が現代に至るまでの間に発生した変化の中には、音韻変化とは別次元の「再形成」と称すべきものがあったことを確認した。すなわち、呉音・漢音相互の干渉や韻書・韻図などを踏まえた体系化などがそれに当てはまる。また、遅くとも中世以降には、実生活で使われる字音が1種類に収れんしていく「漢字音の一元化」があったことも認められた。日本漢字音の特徴として呉音・漢音の複層性が挙げられていたが、その実態とは必ずしも従来考えられていたほどには強固なものではなかったと思われる。このような「再形成」とは現在でも進行中なのであって、日本漢字音の内実とは、従来考えられていたよりも流動的なものであると考えられる。

研究成果の概要(英文)：This study shows that in the history of Sino-Japanese there was a phenomenon which can be called "reformation" and that it happened irrelevant to the phonological changes. Interaction between Go-on and Kan-on, rearrangement based on the ancient Chinese phonology and several Sino-Japanese sounds' merging into one are the case. It is believed that the existence of several Sino-Japanese levels(Go-on, Kan-on and To-in) and their being independent of each other are characteristic of the Japanese language. However, this Multi-Level system is, in fact, not as solid as it is thought. This study points out that this system is rather flexible and that "reformation" of Sino-Japanese is still continuing.

研究分野：日本語学

キーワード：日本漢字音 整備 一元化 呉音 漢音

## 1. 研究開始当初の背景

日本漢字音とは、中国原音に近い形で日本語に取り入れられ、その後それぞれの時代の音韻変化などを被りながら現代に至っている、というのが、素朴な感覚であろうと思われる。呉音・漢音をしゅん別することが日本漢字音史研究の「定石」であることも手伝って、特に近世以前は呉音と漢音とが独立して、相互に不干渉のまま個別に日本語化したという印象が強かったのではないかと想像される。

しかし、そのような図式に疑義を呈する見方が、近年の研究で示されるようになった。まず特定の時代における日本漢字音とは固定的なものではなく、「学問的」なものから「日常的」なものまで様々な層があったことを示したのが佐々木勇『平安鎌倉時代における日本漢音の研究』(汲古書院、2009)であり、平安鎌倉時代の日本漢音には加点者や資料の性質などによって様々な様相があったことが論じられている。報告者自身もそれに着想を得て、平成22年度～25年度に科学研究費補助金の助成を受け、研究を進めていた(若手(B)「漢籍訓読資料に記入された中世日本漢音の研究」)。

その頃に発表された中澤信幸「斉韻字に対する字音注の変遷について」(『国文学攷』202、2009)は、「弟」「帝」などといった「斉韻字」が、呉音・漢音相互の干渉や韻書・韻図などの学習を経て変化してきた有様を記述したものである。日本漢字音の変化の背後にはひとり音韻変化のみがあったわけではなく、学問的な要因も関わっていることを論じたもので、漢字音が「整備」されるという発想には大いに触発されたところであった。

日本漢字音がどのような方向に向かっていくかを考える上で示唆的な研究として、屋名池誠「現代日本語の字音読み取りの機構を論じ、「漢字音の一元化」に及ぶ」(『国語学論集』・汲古書院、2005)も挙げられる。この論文では、今日の日本漢字音では、1字に複数種類の字音が対応している場合であっても、それらは決して対等に振る舞っているわけではなく、意味や漢語の中での位置により読み分けられる状態を経て、一元化される方向に向かっていくという見方が示された。現代の日本語話者の感覚からも、首肯される見方であると言える。

同時に、このような「漢字音の一元化」の流れは古くから存していたという蓋然性にも思い至った。22年度～25年度の若手(B)の中で考察したところによると、中世の『論語』で使用される漢字音とは、漢音を基本にしつつも「学」「軍」などが濁音で出現する傾向があり、これは「呉音の混入」と考えるよりも、当時の「日常的」な漢字音に影響された、すなわちこれらの字音とは当時から濁音形に一元化されていたことによるものと考えた方が妥当であろうという感触を抱いていたからである。

このように、日本漢字音の歴史的変化に関する事柄の中には、単純な音韻変化以外の変化・整備も少なからず含まれているという見通しを抱くに至った。そのような人為的なものを「再形成」と総称することにして、その実態がどのようなもので、どのような背景があるのかを解明しようと考え、本研究を開始した。

## 2. 研究の目的

日本漢字音の歴史には、音韻変化以外にも様々な人為的な要因が関わっているというのが近年の研究の動向だった。本研究は、そのような流れを踏まえ、「再形成」という観点から、日本漢字音の歴史的変化を探ろうとするものである。室町時代以降の文献資料に記入された漢字音のあり方を記述し、そのような形が出力・選択されるに至った背後にどのような事情が存したのかを考察することを通して、日本漢字音史の一つの側面を浮かび上がらせることを目的としている。

それぞれの漢字音が記入されるに際しては、当時日常的に使われていた漢字音のあり方や学問的な反省から生じた規範意識、あるいは他宗派・流派などとの対抗意識など、様々な事柄が介在したことが考えられる。どのような事柄がどのようにして漢字音に影響を与えたのかを分析することによって、当時の学問のあり方や漢字音に対する意識などがあぶり出されることが期待される。

日本漢字音史に関しては、それぞれの時代において呉音・漢音形が固定されていて、それらは均質的で相互に独立していたものであったように、ともすれば捉えられがちであったように見受けられる。本研究は、そのような見方に一石を投じることをも目指したものである。

本研究では、日本漢字音史の終着点としての現代日本語についても、いささかの知見を得ることも目指した。現代でも呉音・漢音などの複層的体系を維持しているというのが従来の見方で、それに対して実は実質的に一元化しているというのが、前節で言及した屋名池氏の見解だった。現代日本語がどのような様相を呈しているのかは、必ずしも自明のことではない。現代日本語の漢字音というものをさらによく理解するための材料の一つを提供することも、本研究の目的の一つである。

## 3. 研究の方法

本研究は、室町時代以降現代に至る日本漢字音がどのように整備されてきていて、その背後にどのような流れや論理があったのかを解明することを目指したものである。過去の文献に記載された日本漢字音とは均質的なものではなく、それぞれの受容者の立場や時代背景などが隠されているという仮説の下、なるべく様々な性質を帯びた資料を検出し、分析することを試みた。その際、可能な

ものは購入するとともに、できる限り実地調査を行い、デジタル画像や複写物を入手した。また、ウェブ上にカラー写真が公開されているものについては、積極的に利用した。

このほか、研究書・参考書を多数購入したほか、現物貸借などを活用して最新の研究成果を消化できるよう努めた。以下、箇条書きにして記す。

#### 1) 江戸時代の字音仮名遣い資料

まず、漢字音に学問的な反省が介在したものとして、江戸時代中期以降の字音仮名遣いの問題に取り組んだ。字音仮名遣いの資料としてつとに知られた文雄『磨光韻鏡』、本居宣長『字音仮字用格』、太田全斎『漢吳音図』、白井寛蔭『音韻仮字用例』という研究の過程と論理の流れとをたどることによって、当時の漢字音研究の発展のしかたや、漢字音に対する見方・学問的な時代背景などといったものを探ろうとした。

#### 2) 呉音・漢音資料

従来、典型的な日本漢字音資料として扱われてきた、仏典・漢籍読誦音についても検討を加えた。このような資料群に現れた漢字音とは、伝統的な形が受け継がれる性質がある一方で、韻書や韻図などを参照して整備されることがあったことは、すでに先行研究で述べられているところである。本研究でも、呉音資料については『法華経』関連文献と『浄土三部経音義』、漢音資料については『論語』関連文献を調査し、加点者の層や資料自体の性質（仮名書きか漢文か）などがどのように漢字音に影響を与えていると考えられるか、分析しようとした。

#### 3) 辞書類

仏典や漢籍に出現する漢語には特殊なものが多く、また規範意識も働いていると考えられることから、当時の日常的な漢字音のあり方を必ずしも反映していないと思われるふしがある。そこで、当時の日常的な漢語が出現する資料として、『日葡辞書』『落葉集』『節用集』『和英語林集成』『言海』などの辞書類に着目し、成立年代によって漢字音の傾向に違いがあるのかなどを調査することを試みた。

#### 4) 現代語に関する調査

日本漢字音史の終着点である現代語についても、一考察を加えた。現代日本語が屋名池誠氏が指摘するような状態（第1節参照）に本当にあるのかを検討するため、「日本語話者にとって、積極的な意味を持たない漢字の羅列」がどう読まれているかを調査し、日本漢字音の歴史と未来を探る一助にしようとした。具体的には、中国人名辞典に記載された人名の日本語読みを取り上げた。

#### 4. 研究成果

前節で挙げた事柄について、個々の具体的な問題点を解決する中で見通しを得ることを試みた。

まず、江戸時代中期以降における豪韻字（「豪」「宝」など）の字音仮名遣いを題材に、学問的な発展のあり方を考察した。豪韻字の字音仮名遣いが「ア段+ウ」「オ段+ウ」のいずれであるかというのは、20世紀に至って解明された事柄である。江戸時代には結局「正解」には至らなかったものの、しかし様々に行われた試行錯誤の跡からは、当時の漢字音研究のあり方や、漢字音に対する（あるいは漢音・呉音というものに対する）見方・時代背景などといったものが浮かび上がってくると期待されたところであった。

『磨光韻鏡』『字音仮字用格』『漢吳音図』『音韻仮字用例』といった江戸時代の研究を通して、豪韻字の字音仮名遣いは「呉音...オ段+ウ、漢音...ア段+ウ」という線に落ち着くのであり、その根拠となったのは、高(コ)や保(ホ)などの万葉仮名としての用法であった。万葉仮名のような日本化した用法を一律「呉音」と認識するなど、現代の視点から見ると資料の扱い方に問題があるとはいえ、とかく演えきと批判されがちな江戸時代の漢字音研究というものも、一面では帰納的で実例に基づいた面があったことは見逃せない。

次に、「収」「朱」など、今日の日本漢字音で「シュウ」「シュ」で安定している一群は、しかしかつては「シユウ」「シウ」「シユ」などと表記が一貫していなかったことで知られる。これは古い時代の日本語の音節構造やサ行音の音価が関わる問題と目されるものであるが、ここでは音韻的な条件がほぼ現代と等しくなっている室町時代後期以降の呉音形について、変化・定着のあり方とその背景にあるものを探ろうとした。

呉音形の「シュウ(シユウ・シウなどをこれに一括する)」「シュ」を決める要素として、1) 韻学的な知識(『法華経』読誦音によく見られる分布で、通撰...シュウ、遇撰・流撰...シユとする)、2) 漢音との対比意識(『浄土三部経音義』に見られる分布で、漢音は長呼形(シュウ)、呉音は短呼形(シユ)とする)、3) 日本漢字音の一元化、という、次元を異にする3点が関わっていると目された。ここでは、シュウ・シユのいずれかの形が、その時々事情に応じて選択されたと捉えるべきであると考えられる。古い時代の混乱とは別次元の再形成を経た形が出力されている、という図式である。

この問題について検討材料の一つとした『浄土三部経音義』とは、長い年代にわたって複数種類の文献が作られ、まとまった分量の字音点も記載されているにも関わらず、従来あまり研究が行われてこなかった資料群である。また、先述した江戸時代の字音仮名遣い研究とも、どうやら没交渉であったという見通しも得ていた。そこで、ここで取り上

げたシュウ・シュにとどまらず、幅広く考察が行われるべき資料と判断されたことから、基礎資料として漢字音の全貌を記述した字音点分韻表を作成し、学界に提供した。

シュウ・シュの呉音形をめぐることは、「漢字音の一元化」という、別の再形成の流れも想定された。例えば「愁」「収」字などは、時代を経るに従って「シュウ」表記例が増える傾向が認められる。現代日本語話者の感覚や、辞書類に記載された見出し語などと照らし合わせても、漢音形に引かれたというよりも、むしろ「愁」などの字音自体が、呉音・漢音に関わらずシュウという形に一本化されたと捉えた方が実情に合っていると思われる。

この「漢字音の一元化」という考え方は、もっぱら現代語について言われていたことであって、江戸時代以前から一元化の流れがあったというのは、いくぶん意外性が伴う見方であろうと察せられる。そこで、室町時代以降書写された『論語』関連文献を主な題材として、古い時代から日本漢字音の一元化が存しなかったのか、考察した。その結果、「百」「勇」「幼」などについては、漢音系資料の中でも「ヒャク」「ユウ」「ヨウ」などといった形が出てくるようになることが読み取れた。これらはいずれも本来呉音形とされる音ではあるが、ここでは仏典の影響などで呉音が混入したというよりも、むしろこれらの字音が「ヒャク」「ユウ」「ヨウ」に一元化されたと考えた方が実情に即していると考えられた。

その一方で、現代日本でも、必ずしも漢字音の一元化が完成していないと考えられるふしがある。現代中国人名の日本語読み、すなわち日本語話者にとっては実質的な意味を持たない漢字の羅列の読み方について、中国人名辞典を題材に調査したところ、必ずしも1字1音にまとまっているわけではない状況が読み取れた。むしろ「任...ジン」「代...タイ」など、日常使用にあまり現れないような音形が出現し、しかも漢音読みされる例が多い様子も見て取れた。現代日本語にあっても、ところによっては呉音・漢音の複層性が機能していることを示していると思われる。

結局、日本漢字音の性質というのは明治時代を境として大きく変容したものではなく、絶えず再形成が行われているという点では今も昔も本質的に変わらないというのが、本研究の結論である。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

(1) 石山裕慈「漢字音の一元化」の歴史」(『国語と国文学』・2018年10月に掲載予定、査読有)

(2) 石山裕慈「中世以降の「シウ(シユウ)」「シユ」の呉音形をめぐる」(『国語語彙史の研究』第37号・pp.231-248、2018年、査読有)

(3) 石山裕慈「浄土三部経音義の字音点分韻表」(『神戸大学文学部紀要』第45号・pp.39-99、2018年、査読無)  
DOI:10.24546/81010196

(4) 石山裕慈「豪韻字の字音仮名遣いをめぐって」(『鈴屋学会報』第33号・pp.15-30、2016年、査読有)

[学会発表](計5件)

(1) 石山裕慈「"Co-existence" of the two major Sino-Japanese systems(GO-ON and KAN-ON)」(International Workshop on Humanities "New Perspectives in Japanese Studies Part 2"(Kobe University Brussels European Center)、2017年)

(2) 石山裕慈「漢字音の一元化」の歴史に関する一考察」(平成29年度東京大学国語研究会(東京大学山上会館)、2017年)

(3) 石山裕慈「中世以降の「シウ(シユウ)」「シユ」の呉音形をめぐる」(第114回国語語彙史研究会(大阪大学)、2016年)

(4) 石山裕慈「現代日本漢字音の一特徴 中国人名の表記を題材として」(第1回北京外国語大学・神戸大学国際共同研究拠点シンポジウム(北京外国語大学北京日本学研究センター)、2016年)

(5) 石山裕慈「江戸時代における字音仮名遣いの整備について 豪韻唇音声母字の場合」(第33回鈴屋学会大会研究発表会(本居宣長記念館)、2016年)

[図書](計0件)

[産業財産権]

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

[その他]

ホームページ等

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

石山 裕慈 (ISHIYAMA Yuji)

神戸大学・人文学研究科・准教授

研究者番号：70552884